

京鹿子



10月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その二十六

せ せ ら ぎ の 組 立 て て ゐ る 夏 の 庭
泉 川 の 茂 り 隠 れ の 式 部 の 墓
か げ ろ ふ に よ り そ ふ 和 泉 式 部 の 墓
姫 女 苑 の 絮 し ば し 止 む 五 輪 塔
円 座 ひ と つ 枯 山 水 に 対 ひ け り
空 蟬 の 眼 の み を 残 す 風 の 中



空 蝉 や 嗟 峨 野 の こ ゑ を た め き れ ず
ふ た み す ぢ 朝 の 風 あ る 青 鬼 灯
青 鬼 灯 に 風 の 来 て ゐ る 露 地 ひ ぐ れ
合 歡 咲 け ば 能 登 の 岬 へ 七 曲 り
鯔 や ぐ ら 水 平 線 ま で な に も な し
塩 田 の 小 屋 ま た す す け る ま ま に 灼 く
谷 深 き 家 は 揚 羽 紋 春 の 逝 く
卿 の 墓 暮 春 木 漏 れ 日 の ひ と す ぢ

狐坂
丸山佳子

人間は目で秋惜しむ狐坂
日も月も私もひとり二百十日
汗を拭く三十六峰ここは端
振り返へることも大切二百十日
敬老日に鳩は天与の水たまり
裸児に貫ひ笑ひしてまた浪費



秀華採集

竹林の騒ぎ出したる五月闇

鳥羽夕摩

五月雨のころの夜の暗さをいうが、なにか動的なものを秘めねっとりとしてい
る。ために句のごとくうごめくのではないか。しかし実際はうごめいてはいない
かも知れない。

草とりや終のひとりとなりし家

村上千紫

日輪の子となりたくて天道虫

藤井節女

「終のひとり」は「終に」よりは深い。そしてなにより「草とり」の設定がよい。
正しく後を濁さず。後句の、羽を割って飛び立つ天道虫への思い入れは、心象め
いて明るく楽しい。

鈴鹿 仁

松ぼくり

朝涼や小手をかざせば山まろし

ちちろ鳴く野風呂句碑への風の道

燕帰る彩づくものをあとにして

松ぼくり雨滴の中の持時間

高木 智氏追悼

悼む夏鶴の染め紙折目よく

近 詠

和田 照海

水分神

男梅雨水分神の石一つ

えごの花悼み咲きして墳丘墓

伯耆富士よりの筧に瓜冷す

しつらへし浮巢に掟ありとせば

窺へばうかがひをりし浮巢鳩

神麓集



病窓に桜を嵌めて昨日今日
逃げ下手の長男に來し花粉症
隴月外人墓地に低吟す
さくらんぼもぎて弾める仲間たち
息抜きに体操してゐる青蜥蜴

隴月 北村香朗

秒針の容赦なかりし菊日和
秋蝶の殺氣一閃時止めて
柚子の村地圖に勾配なき遠さ
八十は峠なりけり残り柿
わがままの紅葉籠りと申すべし

菊日和 竹貫示虹

落し文 藤岡紫水
禪刹やはらり放下の落し文
今宵咲く一花は星に月見草
滴りがはぐくむ苔の寂光土
十葉の十字に闇のととのひぬ
青梅の揺れをさそひて山雨來る

凌霄花 柴田朱美
凌霄花男もノラになりたがる
凌霄に犯されずめの屋無音
ひと言が多くて絡む凌霄花
身の内の垣が崩れて凌霄花
凌霄や愚かな男憎めずに

青葉月男がたゝむ能袴
風灼けて寝返へる吾子の蒙古斑
墓一つ増えて田の水満々と
鉦笛のやはき男の持つ匂ひ
建つ鉦に赤奪はれて西の雲

服部郁史

葉月 丹生をだまき
兵たりし老の語り部敗戦忌
傘立ての傘にすがりて蟬生まる
夕虹の消え失せるまで佇ちつくす
夢二画く女氣怠げ葉月來る
吹く風に葉裏を見せて葛の花

神麓集



救急室の堅きベツトに冷房攻む
山田をがたま
氷枕が唯一の味方微熱なほ
今年亦微熱の続く夏となり
稲の花咲かぬと嘆く豪雨あと
夕立を希ふ彼方に茜雲

蟹股の妊婦の背後虹が立つ
丸井 巴水
壺
花合歡や薬師の壺の不老薬
やや憂ひある人妻や罌粟の花
青すすき遊びは鬼で黄昏る
薔薇の湯や命のかけらまだ磨く

大八洲板子一枚端居かな
小堀 寛
吾は総理木霊のかへる積乱雲
天然のセシウムを吸ひ入道雲
おほいなる銀座の闇よ青メロン
父さんも年寄つてくる蟻が十





京鹿子集

豊田都峰選

竹林の騒ぎ出したる五月闇

一雫言葉としたり生賣鮎

泣くまいと唇をかむ梅雨の闇

追伸の次の一枚五月闇

雲海に一刷け朱さすひとところ

草とりや終のひとりとなりし家

草とりの草それぞれに根をもちて

齒科の椅子真中の凹み走り梅雨

日輪の子になりたくて天道虫

郷の家開けて端居のものがたり

京都 鳥羽 夕摩

豊中 村上 千紫

福知山 藤井 節女

鐘一打揺れる四葩の祈りかな

黄泉路とは曖昧模糊や走馬灯

遠花火風雨を越えて切目なく

隣人と歩を共にする緑雨あと

夏の暁学会準備に余念なし

白南風やスペイン風のホスピタル

梅雨晴れ間干し場取り合ふ大家族

晴れ間なりポランティアガイド紫陽花道

紫陽花は色のうつろひ人に託し

街路灯遠まはりして守宮みむ

アリソナ 伊吹 之博

澁川 東 秋茄子

地震の跡アルバム探す子月おぼろ

さいたま 神田 惣介

知らぬ人話題は仔犬若葉径

誰言ふとなく引き寄する水中花
溝はさみ振れ合ひにけり水草生ふ
風に乗る百のかもめや夏帽子

通勤車女生徒の声更衣

遊牧の馬に郭公の声揃ふ

梅雨入や橋桁隠す賀茂大橋

海までは百軒とあり明易し
ねぢれ花肩肘張つて物申す

大鳥居夏台風をむかへ撃つ

戸田 中村江利子

土堤はしる自転車青葉の青き風

賞味期限はや来てポトル立夏過ぐ

更衣したる教室風軽し

節電の魔もの真夏の昇降機

布川 孝子

猫のこと話しバス待つ夕薄暑

歩かう会女につられ密豆屋

飛鳥仏白鳳仏のみな瞳

千葉 河内 桜人

春あけぼの救世観音の在しけり

朝練のサツカー少年夏つばめ

霾ぐもり玄奘法師旅如何に

登校の先頭は女子雲の峰

高野 春子

子雀の出入り忙しき精米所

性根問はるる夕焼のど真中

竹の葉の落つ淡闇に人の声

伊藤 希眸

船影や岬をかこむ夜光虫

この先は好きな抜け道蛇苺

朱筆放る冷し中華の冷えすすり

青柿の転がる先の黄昏るる

松戸 児玉 有希

嫉みあり遠く合歓の木咲いてゐる

直江 裕子

青騒や生クリームつるの角立てる

鹿の子に見詰められぬるツアー客

もう恋をすることもなき素足かな

旅衣いくつ持たねば男梅雨

甲薄き素足の女話し下手

崖赤し眠りつづける夏灯台

岡山 敦子

夫いまも跣足が好きで下駄が好き

殉教の裔なり五島の南風に生き

その紙魚の足速かりてあどずさる

岡田 愛子

浮び来るままに時繰る雲の峰

時計草針は十時に貴賓館

夏蝶の出自訪ねし午後の庭